

ウィリアム・ジェイムズの自由意志論

—科学的であるとはどういうことか—

林 研

(和文要旨)

自由意志の有無という議論において、近年脳科学の成果を用いて決定論を主張する意見が多くなっている。しかし科学実験の解釈には問題もあり、実際に証明がなされたとは言えない。決定論は科学的な装いによって支持を集めているものの、実際のところは理論というよりも世界観である。逆に、ジェイムズは機械的な反射説を受け入れていたにもかかわらず、そこに自由意志が介在しうるモデルを考えていた。科学的な人間理解と自由意志は両立しうるのである。

ジェイムズのプラグマティズムはもともと科学的な真理論として構想されており、証拠の得られない仮説を信じて試してみることを検証と考える。自由意志を信じることは物事を改善する意欲となる。そして、その結果としての善の実現は意志の自由を支持するのである。脳科学が証拠を提示できない以上、自由意志の問題は哲学の問題であり、そうであれば信じて確かめるプラグマティックな方法が科学的であるとも言える。

(SUMMARY)

In the argument of whether our will is free or not, deterministic opinions have gradually increased owing to achievements of brain science. There are, however, many unclear points in interpretations of scientific experiments. So, it cannot be said that critical evidence has been presented. Although determinism is favored because of its "scientific" appearance, it is in fact a worldview rather than a theory. In contrast, James supposes, in spite of his acceptance of mechanical reflex-theory, a model in which free will can intervene in the reflex. A scientific

understanding of human beings can be compatible with free will.

James's pragmatism, originally envisaged as a scientific theory of truth, regards attempts to believe in hypothesis without evidence as verification. Believing in free will gives rise to the willingness to improve things. Realization of good as a result supports the freedom of will. Because neuroscience has not been able to give evidence, the free will problem should be a philosophical issue. Then, the pragmatic method of believing and verifying can be thought of as scientific.

1. 序

意志の自由というものが本当にあるのか、というのはよく知られた哲学上のテーマである。人は常識的には自分の意志に従って行動しているつもりである。しかし近代以降、万物は物理法則に支配されており、人間の思考も行動もすべて決まっているという機械的決定論がしばしば説かれ、一定の支持を集めてきた。

近年この議論は盛んになっており、とりわけ脳科学の成果を参照して自由意志を否定する見解が喧伝されているようである。しかし、意志の自由は道徳的責任の根拠ともみなされるものであり、決定論を認めれば現実生活にも大きな影響を及ぼすことになる。例えばアメリカでは、殺人の弁護に「脳内物質の状態のせいだ」という主張が大真面目になされる事態も起こっている¹。こうした見解は、「科学的」という装いに大きく影響されていると思われる。およそ妥当とは言い難いこの状況については、科学的言説の信頼性について吟味すると同時に、科学の意味を再考する必要もあるだろう。

本研究では、自由意志をめぐるこうした問題状況に関して、ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842–1910) の哲学を用いて考察を行いたい。ジェームズはまとまった形で自由意志論を著述してはいないが、意志の自由が彼の根本的なテーマのひとつであることは広く研究者に知られている。また、ジェームズはもともと科学者とし

¹ エリエザー・スタンバーグ 『〈わたし〉は脳に操られているのか』 インターシフト、2016年 (Eliezer J. Sternberg, *My Brain Made Me Do It: The Rise of Neuroscience and the Threat to Moral Responsibility*, Prometheus Books, 2010)、13–16頁。この例は、なんら病的な診断がなされていない容疑者についての弁護である。

での訓練を受けており²、特に心理学の研究においては、心の仕組みを脳の構造や生理学を考慮して記述しているため、自由意志の問題が科学的にも哲学的にも熟考されていることが推察できる。

そこで本稿では、前半でジェイムズの科学的な側面を取り上げ、現在の脳科学の成果も検討しながら、自由意志の問題を精査する。後半では哲学的な側面から、自由意志を信じる正当性を吟味するとともに、科学とは何かという問題を見直すことにする。

2. ジェイムズにおける科学と自由意志

心理学時代のジェイムズは科学的志向が強く、経験的事実にもとづく科学的心理学の構築を目指していた。この頃の著述においてジェイムズは、自由意志の問題は科学によって結論できないと判断している。

まず「意志」という主題についてであるが、ジェイムズ心理学では拮抗する選択肢のうちひとつを選ぶ決断の場面が注目される。選択肢が同等の条件や魅力を持つ場合、そのひとつが選ばれることは必然ではない。選択を行うのはまさに主体の意志なのである。より具体的には、選択は選択肢の一方に「注意」を向け続けることによってなされる。このとき、もう一方を捨てることには逡巡が生じるため、心理的な「努力」が必要だとされる。

したがってジェイムズによれば、「注意の努力が意志の本質的現象である」(PB 418)ということになる。この場合、もし意志の自由を科学的に観測しようとするならば、内的な努力の量がデータとして必要になるが、これは事実上計測不可能である。このことから、ジェイムズは自由意志の問題を保留する態度を示す³。

自由意志の問題は厳密に心理学的基盤に立っては解決できない……仮に私たちの意志が自由であっても、[心理的な]努力の量は計算しえないものであり、科学的心理学はこれを扱わない……科学的心理学は自由意志の存在を必ずしも否定することなく自由意志を無視するのである。(PB 423-424)

² ジェイムズはハーバード大学ローレンス科学学校に入学して化学を専攻し、その後生理学に転じ、医学の学位を取得している。教員としての最初のポストも生理学講師であった。

³ ただし、第6節で述べる青年期の抑鬱と回復のエピソード以来、ジェイムズ自身は自由意志を信じていたはずである。この保留の態度は、科学としての心理学という枠に誠実であったためと思われる。

証拠が示せないのであるから、決定論の立場が選ばれることもない。この問題はまったく中立に放置されるのである。機械的決定論者は一般に、生物が物質から成り立っていてメカニカルな基盤を持つことから、すべてを機械的に理解する。生理学に通じているジェイムズもちろん生物の機械的性質は熟知しているが、それがすべてだとは考えないのである。

例えばジェイムズは、当時の生理学の大きなトピックであった「反射」説を全面的に受け入れている。動物の行動は感覚の入力があり、中枢で流れが反転し、運動という出力に至るものであり、人間の心理や思考もその流れに則るといっているのである。ただし、中枢は思考を行う場であって、ここには意志の働きが含まれると見るのがジェイムズの理解である。

神経系の構成単位は事実として三つ組であり、そのどの要素も独立の存在ではない。感覚の印象は中枢の反省過程を呼び覚ますためにだけ存在し、また中枢の反省過程は最終的な動作を呼び起こすためにだけ存在している。このようにすべての作用は外部世界への反=作用である。(WB 541-542)

この第二段階における思考が、その後の行動に因果的に作用するという見解を明確に示しているのは次の箇所である。

その〔生命の〕流れが内部に生じている間、思考⁴の唯一の効用は、現実に目の前にある状況のもとで、これら〔目、耳、手足、唇などの〕どの器官もが全体として私たちの幸福にもっとも都合がよい仕方ではたらくように、その方向を決定することである。(WB 542)

つまり、反射である限り、感覚から作用へと「流れ」が進むことは必然的であるが、その間で思考による方向づけ、いわば舵取りが可能だというわけである。これは反射作用の中に心的因果が介在するモデルとなっている。

この理解には、自由意志を擁護する上でのメリットもある。それは、思考という機

⁴ これは「思考」についての記述であり、「意志」に言及されていないが、次節で述べるように自由意志の議論は心的な働きが行動に因果的に作用するかどうか为核心であり、ここでの記述は心的因果の主張という意味で自由意志を肯定していると言える。

能が存在することの理由を進化論的に説明できることである。単に機械的な反応だけなら、反射は入力と出力だけでよいかもしれない。しかし実際は、神経系の構造からしても感覚神経と運動神経の他に中枢部分が存在し、人間ではとりわけ大きく発達している。そうであれば、中枢が行動を変化させるために存在するという蓋然性は高い。刺激に対する反応が複雑で多様であることが生存に有利であるからこそ、主体的な選択能力が進化してきたとジェイムズは考えるのである。

私たちの意識⁵は存在している……意識が効用を持たないということは、アプリオリに、まずありそうにない。その効用は、選択ということのように見える。(PB 109)

より原始的なレベルでも、例えば快や苦の感覚は、生き延びるのに有利な行動を選ぶのに役立つと考えるのが普通である。進化上での快苦の因果的有効性は生物学者も前提と考えるほどに信憑性が高い考えだと言える⁶。

3. 自由意志をめぐる現代の議論

現在、自由意志の問題については様々な見解がある。この問題は「意識とは何か」あるいは「物理的な脳からどのようにして意識が生まれるのか」といった諸問題と重なり合っているため、かなり複雑な様相を示しているが、ここでは意志の自由という点にのみ絞って大枠での分類を示すことにする。

まず、機械的決定論の原理にそのまま従い、意志の自由は存在しないと断定する決定論の立場がある。この立場によると、人間の行動はすべて物理化学法則に従うということになる。旧来この思想は偶然の存在をも拒否していたが、量子力学によって物質存在の基盤にランダム性が認められたため、ランダムな偶然性は許容されることになった。しかしランダムであっても、人間の選択的な意志は否定されることになる。反対に、意志は因果的に作用して行動を変えることができるというのが自由意志論の立場である。これはまったく常識的な考えであるが、その原理が科学的に説明できな

⁵ ここでは「意識」の語が用いられているが、この記述は決定論に基づく自動機械説への反駁の文脈であり、自由意志論を肯定する意図であることは間違いない。

⁶ William James, "Are We Automata?" (1879), *The Works of William James: Essays in Psychology*, Harvard University Press, 1984, pp.55–56.

いという難点がある。

そして、哲学上の立場として一定の支持を集めているものに、両者を折衷した両立論がある。両立論は行動について機械論的な解釈を取るのだが、因果ではなく状況が自由であるかどうかを問題にする。つまり、意志と行動は結びついていないのだが、状況に選択肢があつて、何の強制力もなくどちらを選ぶことも可能な中でひとつの行動が選ばれ、それを意識が承認するならそれは「自由」だと言うのである⁷。ここで想定される意識の理論は典型的な「随伴現象説」である（この説は厳格な決定論でも採用される）。この見解は、意識を単に脳活動から派生的に生じたものと捉える。脳が行動を自動的に決定しているにもかかわらず、意識はそれを意志によって決めたもののように錯覚するというのである。

自由意志に関する立場は大きくこの三つに分けられるが、両立論はバランスが良い一方で根本的な解決になっていないとも言える。というのも、哲学的に意識と自由の意味を分析することに意義があるとはいえ、一般人にとっての問題は意志が因果的に作用するかどうかだからである。両立論は「自由」の定義をずらしているのであり、因果の点から言うと決定論でしかない。結局問われるべきは、意志は因果的に働くものなのか、あるいは因果作用のない随伴現象なのか、ということである。

さて、こうした状況のもとで、現代の議論では脳科学が決定論を支持するという見解が広まっている。この傾向は、有名なリベットの実験に端を発すると見てよい。1980年代、神経科学者のベンジャミン・リベット（Benjamin Libet, 1916–2007）は、次のような実験を行った。脳波を計測されている被験者に、任意のタイミングで手首を曲げることが指示される。被験者は円状に回転する光を見ながら手首を曲げ、曲げようと意志したときに光がどこにあったかを報告することで、その時点を特定できるようにする。その結果を見ると、実際の行動の0.5秒前に脳で準備電位が発生しており、意識的な決断のタイミングは準備電位の発生よりも0.35秒後、行動の0.15秒前であった。つまり、時系列は準備電位の発生、意志の発生、動作の順であり、意志が行動を起動していないということがわかったのである⁸。この結果を知った多くの論者が、因果関係から見て意志は原因ではなく随伴現象にすぎないと判断し、決定論や両立論が

⁷ スタンバーグは次のように説明している。「両立論者は……自由意志は意識の能力ではないと主張する……思考や行為のコントロールとは無関係で、選択権の有効性と関係がある」（『〈わたし〉は脳に操られているのか』、41頁）。

⁸ スタンバーグ、『〈わたし〉は脳に操られているのか』、102-103頁。

正しかったと主張するに至っている。また、このリベットの実験以外にも決定論を支持するとされる科学実験は数多くなされており⁹、科学は決定論を証明しつつあるかのように思われているのが現状である。

しかし実のところ、リベットの実験を含めてほとんどの実験は、その解釈に問題あることが指摘されている。批判の論点をまとめると、まず第一に、実験はどれも単純な行動を扱っていて、熟慮の上での行動にまで一般化できるのかという問題がある。決断には、ほとんど無作為にできるものもあれば、悩み苦しんだ末に行うものもある。ジェイムズが内的な努力の量を計測できない限り科学的に結論できないと言ったのは、熟慮の場合を視野に入れているからであろうし、意志の力はこういった場合にこそ表われるとも言える。

第二に、実験はしばしば「意志が行動を決定していない場合」の具体例を見つけ出すのだが、自動的な行動が存在することと、自由がまったくないこととは当然異なる。実際われわれは無意識の行動というものがあることを承知しているし、状況に流されて不適切な行動をしてしまう経験もあるだろう。だからと言ってそれは自由意志の否定にはならない。

そして第三に、実験の構築から解釈まで、いたるところに決定論への先入見によるバイアスがかかっている。例えばリベットの実験については、行動の「起動」こそが意志の表われとみなされがちであるが、そのことは自明ではない。実際、リベット自身はこの実験結果を決定論の証明とは解釈していない。リベットの主張は、意志が生じたのちの 0.15 秒のうちに行動を止められる可能性に意志の自由を見るという「拒否権仮説」なのである。

以上の問題点を考えると、結局のところ現時点での脳科学実験は意志の自由に関する証拠を提示できていないと言うべきであろう。

4. 科学的人間観と心

こうした実験について、ジェイムズの見解を照らし合わせれば、何が見えてくるだろうか。まず、ジェイムズの立場からすれば、リベットの实验は全く問題を生じない

⁹ こうした実験は、スタンバーグの前掲書や、アルフレッド・ミーラー『アメリカの大学生が自由意志と科学について語るようです』春秋社、2018年(Alfred R. Mele, *A Dialogue on Free Will and Science*, Oxford University Press, 2013)に数多く紹介されている。例えば、スーンの実験、ウェグナーの実験、ミルグラムの実験、スタンフォード監獄実験、ガザニガの研究など。

と言える。反射が行動のベースであり、意志は方向を変えるものという舵取り仮説は、ある意味リベットの拒否権仮説を先取りしている。むしろ、リベットの説がゴー/ストップというダイナミックな制御を想定するのに対し、ジェームズの説は流れを左右に振り分けるような形であり、より柔軟でスマートであるように思える。いずれにせよ、ある程度人間を機械的に捉えても、自由意志の仮説は可能なのである。

また、ジェームズが言う「反射」は個々の「刺激－反応」の単位だけではなく、それが多数複合した大きな反射システムの意味も持つと解釈される。例えば「私の用語法では、主体に反応を生じさせる〈対象〉とは、状況全体のことである」¹⁰という記述があり、これはある状況がひとつの反射を引き起こし、それによって何かひとつを付け加えられた状況全体が、次の反射を引き起こすというモデルを示唆している。これは反射のループが再帰的にフィードバックを繰り返して、状況を次々に改訂していくという世界観である。こうしたヴィジョンにおいては、「心」は実体的なものでも固定的なものでもなく、環境と相互作用しながら生成するものと見ることもできるだろう。

このような見解に近いものとして、河野哲也の言う「拡張した心」という考え方がある。河野は、心を外部環境を含めたトータルなシステムの中に成立しているものとするのだが、これはジェームズの見解にかなり類似している。そしてこの見地からすれば、自由意志の働きも状況全体の中に生じるものとみなすことができる。河野は次のように言う。

行為の動機は、時間的にも空間的にも広がりをもって醸し出されていく。行為の動機となるような文脈や背景が徐々に形成され、その文脈における自分の内外のさまざまな事柄がきっかけとなって、ある行為が生じるのである¹¹。

また、「意志するとは、行為を発する決意のことではなくて、ある目的を達成するように（あるいは、理由に沿うように）自分の行動を調整すること」¹²とも言われており、これはほとんどジェームズの舵取り仮説のような見解である。

¹⁰ William James, “The Physical Basis of Emotion” (1894), *The Works of William James: Essays in Psychology*, p. 301n.

¹¹ 河野哲也『暴走する脳科学』、光文社新書、2008年、160頁。

¹² 同書、166頁。

ジェイムズも河野も、科学的な事実を否定するわけではなく、あくまでも物質的な脳機構の上に自由意志論を乗せている。つまり、「心」の理解の仕方によっては、科学と自由意志はなんら衝突することなく、調和しうるのである。

5. 決定論と科学

科学的な見方と自由意志は両立しうる。そして科学実験は何も証明できていないというのに、なぜ決定論が優勢に見えるのだろうか。それは、決定論が物理法則を根拠にした理論であり、科学的な装いをまとっていることが大きいだろう。しかし決定論は本当に科学によって支持されるものなのだろうか。

物質が物理法則によって決定論的にふるまうのは観察の結果明らかである。しかし、人間が決定論的にふるまうという考えは観察の結果ではない。そして物質の特性をそのまま敷衍するには、人間はあまりに性質が違う存在ではないか。改めて考えると、決定論は帰納的推論ではなく、むしろ演繹的推論から導かれているように見える。

そもそもデカルト以降の近代哲学的思考は、精神について屈折した状況を作り出しているように思われる。精神と身体を分離して対立状況を作りあげ、心と脳が矛盾すると指摘した上で、それを解消するために心の機能を消去しているのである。こうしたことは、決定論が科学理論である以前に哲学的世界観であることを示しているとも言いうるだろう。

ここで再び、意志の自由は科学によって判断できないというジェイムズの見解に戻ろう。例えばジェイムズは次のように言う。

〔決定論と非決定論という〕互いにはっきりと否定し合うこれら二者のどちらが正しいかを語るために、科学が呼び出されうるだろうか……他の事実によって証明されうるのは事実だけである。可能性であって事実ではない事柄と、事実とは関わりを持たない……可能性を支持する者と可能性を否定する者を分けるのは、信仰または公準—合理性の公準—の違いなのである。(WB 571)

つまり、決定論と自由意志論の対立は、どちらを合理的と感じるかという心理的傾向によるとジェイムズは見るのである。哲学上の立場の理由を論者の気質に求めるのは極めてジェイムズらしい見方なのだが、それはともかくとして、ここでは〈決定論

が科学的な見解であり、これと自由意志論とが対立している」という構図が誤りであり、〈決定論を含む自然主義が自由意志論と対立しており、科学は中立〉という構図が実態だということが指摘されているのである。

ジェームズはもともと科学に大きな信頼を寄せているが、同時に自然主義を批判する態度を取っている。「科学は、その本質においてとりあげられる場合、ひとつの方法をのみ意味するものであり、いかなる特別な信念をも意味しないはずである」¹³と云うように、ジェームズにとって科学は基本的に仮説と検証という方法論なのであって、「特別な信念」としての自然主義と必ずしも結びつくものではない。

自然主義は、世界を構成するものはわれわれの知る自然的なもののみであるという考え方であるが、ジェームズの経験主義は、常にいまだ経験されていないものの存在を想定する謙虚さを持つ。例えば、「真理についてのすべての基本的構想はすでに科学によって発見されている、という教師がこの大学にも一人ならずいるが……彼らはあまりにも科学的想像力の欠如を顕わにしている」（WB 496）と云うように、いまだ発見されていないものを「ない」と判断することは、科学的ではないとさえ言われているのである。

この見方は、自由意志論を支持する上でも有用である。自由意志論の旗色が悪いように見える最大の原因は、脳という物質が意識という非物質と相互作用しうるメカニズムが説明できないことである。しかし、原因が未発見であることがその現象を否定する理由にはならない。材料が揃っていないければ、正しい説明ができないのは当然なのである。

ところで、ジェームズ哲学と言えばプラグマティズムが有名であるが、この理論はそもそも科学的方法による真理論として提示されたものである。ジェームズは次のように言う。

私たち〔プラグマティスト〕の観念や信念における「真理」は科学において真理が意味するのと同じものを意味する。すなわち……観念は、私たちが私たちの経験の他の部分と満足な関係に入る助けになってくれる限りにおいて真となる……観念は道具として真なのである。（PR 512）

¹³ William James, "Address of President before the Society for Psychical Research" (1896), *The Works of William James: Essays in Psychical Research*, Harvard University Press, 1986, p.134.

また別のところでは、「もっとも真に近い科学的仮説はもっともうまく〈はたらく〉仮説」(WB 450)とも言われており、科学的真理もまた、他の経験と満足な関係にあることだと捉えられている。つまり、科学とプラグマティズムはどちらも有用性と整合性の検証なのであって、その違いは単にスパンの長さや対象の広さだということになる。この見解の評価は科学をどう理解するかにも左右されるが、少なくともプラグマティズムが方法論的に科学性を含んでいるという点は否定できないであろう。

6. 「信じる意志」と自由意志

ジェイムズのプラグマティズムは、行動することで真理に参画するという能動性を特徴としているが、この傾向はプラグマティズム提唱前の論文「信じる意志」でも認められる。「信じる意志」は信仰擁護の学説であるが、この議論はジェイムズの中では自由意志の問題と結びついている。ジェイムズは、宗教についても自由意志についても、直接その主張を論証しようとはせず、それを信じるのが正当であるという論じ方をする。

「信じる意志」で展開される議論は、「証拠のない事柄を信じるべきではない」という意見への反論であり、そこでの主張は、「命題間の選択がその性質上、知的根拠に基づいては決められない正真正銘の選択である場合にはいつでも、私たちの情的本性がその選択を決定するであろうことは合法的であり、またそのように決定するのだからなければならない」(WB 464)というものである。このテーゼの詳しい分析はここでは行わないが¹⁴、注意すべきは、事実に基づいて知的に検証することは大前提であり、これはそれでも証拠の得られない場合、それも実践的な切羽詰まった場合にのみ適用される主張だということである。

そしてさらに「信じる意志」には二段階目の主張があり、ある特定の種類の命題においては、信じるのが真理にとって不可欠であることが示される。その命題とは、「ある事実に対する信仰が、その事実を生み出す助けになりうる場合」(WB 474)と表現されている。これは、信じることで初めてその事実が実現するようなシチュエーションであり、人間の行動が内に含まれているため行動によって結果が変わってくる

¹⁴ 筆者の「信じる意志」理解については、拙論「信念の倫理とプラグマティズム—ウィリアム・ジェイムズ〈信じる意志〉をめぐって—」『宗教研究』第381号、日本宗教学会、2014年を参照されたい。

性質を持つ状況である。これを先行研究にならって「自己立証的 (self-verifying)」な状況あるいは命題と呼ぶことにする¹⁵。ジェームズによれば、道徳や宗教の問題というのはこれに該当する。そして、この命題はもともと自由意志の問題がテーマであったとみられる。

ジェームズについての伝記的な書物¹⁶には必ず記されているエピソードとして、青年期の抑鬱状態とそこからの回復の話がある。その回復のきっかけはジェームズの日記によれば、フランスの哲学者シャルル・ルヌーヴィエ (Charles Renouvier, 1815–1903) の自由意志論に強い感銘を受けたことだという。ジェームズの記述では、ルヌーヴィエによる自由意志の定義は、「他の考えもある中で私がそれを選ぶがゆえに、私はその考えを持ち続ける」¹⁷というものであり、自由意志の存在を信じるか否かの選択も自由意志によるのであり、自由意志を自由に信じることで意志の自由が実現するとジェームズは受け取ったようである。例えば次のような記述がある。

もし私たちが自由ならば、私たちの最初の自由なる行動は、私たちが自由であることをすべての内的態度において断言することであるべきである。このことは、自由意志の側から、問題を無理やり論証する望みを除外すべきであるように思わせる。私としては、まったく喜んで論証なしですませるのである。(WB 566-567)

このように、ジェームズの自由意志論は、最終的には「信じる意志」に依存する。意志の自由は証拠の得られない人生の切羽詰まった問題であり、信じなければ真理であると示せないものだからである。

もちろん、信じることをせず、間違いを避けることを重視して疑い続けることも正当と認められるが、それは普遍的規則としては不適當である。なぜなら、自己立証的命題において、「真理を得る」「救われる」といった結果を得ようとするならば、信じる必要があるからである。「証拠がなければ信じるべきではない」という規則の

¹⁵ self-verifying はジェームズ自身の語ではないが、欧米のジェームズ研究ではよく用いられる表現である。

¹⁶ 例えば、梶田啓三郎によるジェームズ『宗教的経験の諸相』岩波文庫、1970年の「解説」、408-411頁、伊藤邦武『ジェームズの多元的宇宙論』岩波書店、2009年、42頁、レイ・メナンド(野口良平・那須耕介訳)『メタフィジカル・クラブ』みすず書房、2011年、218-220頁などにこのエピソードが語られている。

¹⁷ *The Letters of William James, vol. 1*, Atlantic Monthly Press, 1920, p. 147.

提唱に抗してジェイムズは言う。

もしある種類の真理が本当に存在するなら、その種類の真理の認容を完全に妨げることになる思考の規則は不合理な規則であろう。(WB 477)

そしてこの論理は、ほとんど同じ形で自由意志に関しても適用されている。

私自身は自由意志論者に同意する……なぜなら、もし自由意志が真であったならば、宿命論への信念を宿命的に受容させられることは不条理だからである。¹⁸

自由意志を信じるということは、宿命を打破できるということであり、それは物事を改善する意欲につながる。実際、経験の上から見る限り人間は主体的に行動することで善を生み出すことがあるように見える。この現象は自己立証的である。しかし善は判断の基準となりうるだろうか。

7. 自由意志と善

ジェイムズのプラグマティズムでは、信じて行動することは実験的検証であり、結果が善いものであれば、それは真理とみなされる。しかし、善いということは価値の判断であって、事実の真偽判断とは異なるという反論が当然起こってくる。これは検討を要する難しい問題なのだが、少なくとも宗教や自由意志については、それがもともと価値を含んだ概念であるという点からの議論が可能であろう。

宗教は普通、何かしら善い結果がもたらされることを説くものであり、一般に神は善の属性を持つ。ジェイムズ流に言えば、善を説かない宗教は信じられることはなく、歴史の中で生き残ってこられなかったであろう。したがって、宗教の真偽をプラグマティックに考えれば、善がもたらされるかどうかによって蓋然的な判断が可能であり、善の出現は少なくとも宗教の確からしさを増すデータだと言える。

¹⁸ William James, *Talks to Teachers on Psychology: and to Students on Some of Life's Ideals* (1899), *Writings 1878-1899*, p. 820.

では、自由意志はどうだろうか。プラグマティズムは、形而上学上の論争を実際的な効果のもとに捉えなおそうとするので、自由意志についてもジェイムズは言い換えを行う。

自由意志とは、プラグマティックには、世界における新しさ (novelties) を意味する。(PR 538)

新しさとは、既に起こっている出来事の連続から外れた出来事の出現であり、つまりは決定論の否定である。では、新しさのある世界とない世界とでは何が異なるのか。何も異ならないなら、新しさの有無は意味のない問いである。逆に言えば、この問いが切実であるのは、新しさが多数の人に要求されているからである。ジェイムズは、その要求が生じる大きな理由が悪の問題だと指摘する¹⁹。われわれの生きる世界には実際に悪が存在しているのであり、われわれはそれを改善したいのである。

すでに完璧な世界においては、「自由」は悪くなる自由しか意味することができない……人が合理的に要求しうるのは、もちろん、物事がより善くなるだろうという可能性だけである……自由意志はかくして、救いの説である以外にはなんの意味ももたない。(PR 539)

つまり、自由意志という概念は、物事がそのままであるのではなく、より善くなる可能性の希求なのである。

自由意志はこうして、ちょうど絶対者、神、霊、設計などと同じように、普遍宇宙的な約束の理論である。(PR 538-539)

こうして、宗教や自由意志は、その概念の内に善への希求が含まれていることが見出された。これは言い換えれば、それが真理であれば物事がより善くなることが期待される仮説だということである。したがって、宗教の真理性が善の訪れによって支持

¹⁹ 本稿では扱っていないが、ジェイムズは『信じる意志』所収の「決定論のジレンマ」でも悪の問題を中心として、決定論の持つ弱点を突く議論を行っている。

されるように、自由意志の真理性も善の訪れによって支持されてよいことになる。自由意志の存在を信じて行動し、それが善い結果を生むことで検証が可能というプラグマティズムの論理は、方法として理にかなっていると言える。

つまり、宗教についても自由意志についても、通常の科学実験が通用しないなら、試してみることに科学的態度だというのがジェームズの見解になる。宗教的救済や善、自由意志などは世界に新しさが存在することと不可分であり、新しさは未来にしか証明できない。だからこそ試した結果、救済や善が生まれることこそが科学的検証だとみなせるのである。

8. 結

現代の自由意志の議論は、脳科学の成果によって決定論が優勢に見えるものの、実は個々の実験の証拠能力は決して高くない。従来の科学的方法で証明できないのだとすれば、それは哲学の問題であり、プラグマティックな方法はひとつの選択肢となる。そしてプラグマティックな方法は合理主義的な方法よりも科学的なのである。

決定論が科学的であるというのは近代哲学的思考による一種の錯誤であり、本来科学の活動は試してみることを奨励するものである。ジェームズは、間違えるリスクを負いつつもあえて信じる方に踏み出す「信じる意志」の態度をしばしば「冒険」と呼ぶ²⁰。この冒険の姿勢は近代の閉塞を乗り越えるきっかけになるとは言えないだろうか。ジェームズの心理学的人間観からすれば、主観的なバイアスのまったくない判断というのは不可能であり、理性の純粋な働きというものは現実的ではない。むしろ、主観的バイアスを認めた上で、リスクを負いつつも現実との整合性を検証していくというのが、プラグマティズムの「真理に参画する」生き方である。こうした姿勢は今風ではないかもしれないが、だからこそ、冷笑的な気分から決定論を支持する現代人への処方箋となりうるように思われるのである。

²⁰ 例えば、「人々の様々な過剰信念、各々の信仰上の冒険 (faith-ventures) は、実際、証拠をもたらすために必要とされるものである」 (PR 619) など。これは典型的に自己立証命題の指摘である。

凡例

本稿で引用したジェイムズの著作のうち、主なものは以下のとおりである。

Psychology : Briefer Course, 1892. (PB): *Writings 1878-1899* (New York: The Library of America, 1992).

The Will to Believe, 1897. (WB): *Writings 1878-1899*.

Pragmatism, 1907. (PR): *Writings 1902-1910* (New York: The Library of America, 1988).

上記著作に関しては、引用・参照部に略号とそれぞれの頁数を示した。引用文の翻訳および引用中の強調は筆者によるものであり、〔 〕内は筆者による補足である。

キーワード：

自由意志、脳科学、科学的方法、近代合理主義、プラグマティズム

Keywords:

free will, brain science, scientific method, modern rationalism, pragmatism